

【研究ノート】

# 認知症高齢者とのコミュニケーション「バリデーション」に関する研究動向 —文献レビューからの考察—

三田村 知子\*

Research Trends on “Validation,” a Technique for Communication with the Elderly with Dementia  
– Consideration From a Literature Review –

Tomoko Mitamura

## 要 旨

バリデーションというコミュニケーション法に関する研究を概観し、目的や成果を整理することを目的として文献検討を行った。「バリデーション」「認知症」をキーワードに検索したのから、原著論文12件を選出して分析を行った。その結果、先行研究から「認知症高齢者の感情表出」「介護を困難にする行動・心理症状の改善」「バリデーションの有効性への探求」「認知症高齢者以外の対象に関する効果、可能性」という4つの目的と成果に整理することができた。そこからバリデーションの支援の可能性として「認知症高齢者の感情表出を促す要素」「介護を困難にする行動・心理症状に変化をもたらす要素」「ケアをする者に変化をもたらす要素」という3つの示唆が得られた。

## Abstract

This report surveyed studies on the communication method known as “validation” and conducted a literature examination for the purpose of compiling their goals and results. A search was conducted using the keywords “validation” and “dementia,” and 12 original papers were selected for analysis. The analysis revealed four goals and results: “encouraging emotional expression in elderly people with dementia,” “improvement in behavior and psychological symptoms that make it difficult to provide care,” “increasing the effectiveness of validation,” and “effects on persons other than elderly with dementia.” As a result, three suggestions were obtained for the possibility of providing care using validation: “elements that encourage emotional expression,” “elements that lead to a change in behavior and psychological symptoms that make it difficult to provide care,” “elements that have a changing influence on the person providing care.”

● ● ○ **Key words** バリデーション validation / 認知症高齢者 the elderly with dementia / コミュニケーション communication

受付日 2014.9.10 / 受理日 2014.10.28

\* 関西女子短期大学 医療秘書学科 助教

## I. はじめに

厚生労働省の研究班による調査結果では、平成24年時点での65歳以上の認知症高齢者数は462万人にのぼり、その予備軍ともいわれる軽度認知障害にある高齢者数は400万人になるという推計が示された<sup>1)</sup>。また、警察庁より平成25年中の認知症を患った行方不明者は1万322人、前年比7%の増加になることが明らかにされた<sup>2)</sup>。それを受け、警察庁は全国の警察本部に行方不明者の発見や保護に向けた対応を強化するよう指示し、厚生労働省も行方不明者についての全国調査（介護の必要度などの実態調査）を開始した<sup>3)</sup>。認知症高齢者は今後も増え続け、その支援や対策の不備による深刻な問題も次々と表面化してくることが予測される。認知症高齢者に対する支援の重要性は高まる一方である。

認知症高齢者の支援といっても医療・保健・福祉など多方面からのアプローチが存在するが、いずれの分野であってもその対象となる認知症高齢者とのコミュニケーションは、ニーズをつかんで各々の支援に繋げたり、支援による効果を確認したりする上でも欠かせない重要な要素である。しかし、認知症高齢者との意思疎通は困難であることが多く、それが不可逆的な中核症状によるものであるが故に十分なアプローチがなされていないと考える。

認知症になり、意思表示がどれだけ困難になっても“意思”がなくなるわけではない。認知症高齢者の多くは記憶や認知、判断力の障害が進むと、それに伴い意思疎通が難しくなるが、感情機能は保たれていると言われている<sup>4)5)</sup>。感情が残りながら、それを伝える術を徐々に失い、周囲から理解されない状況に日々身を置くことの辛さは計り知れない。利用者主体の支援、そして尊厳ある支援を進めていく観点からも、どのような状態であっても人は最期まで思いを受け止められるべきであり、それが意思の疎通が困難になる認知症であればなおさら、意思をいかに汲み取るのか、ということに重点がおかれるべきであろう。

意思疎通を図るためには、コミュニケーションが欠かせない。認知症になると認知障害をはじめとする様々な障害によってコミュニケーションが阻害される。そのため、認知症高齢者とコミュニケーションをとるためにはその認知症の症状を考慮した方法が必要

となってくるが、それに対応しているのが認知症高齢者とコミュニケーションを行うための方法「バリデーショ」である<sup>6)</sup>。バリデーショは、尊厳と共感をもって関わることを基本とし、認知症の進行に応じた具体的なテクニックで感情表出を促すコミュニケーション法である。

2002年にバリデーショがわが国に紹介されてから医療・保健・福祉など様々な分野で注目され、導入されてきている。それに伴い、バリデーショの研究報告もみられるようになったが、その導入目的や方法、程度もさまざまである。しかし、これまで十分に我が国のバリデーショに関する研究の状況について整理がされていない。今後、より広く深くその有効性を検証していくためにバリデーショの研究目的を整理していくことが重要だと考える。

そこで本稿では、文献研究を通して我が国におけるバリデーショの研究を概観し、これまでの研究目的や成果を整理する。そこから、認知症高齢者の尊厳を守る生活支援につなげていくためにバリデーショはどのような支援の可能性があるのか考察することを目的とする。

## II. バリデーショの概要

バリデーショとは、認知症高齢者とのコミュニケーション法である。バリデーショという言葉そのものには「強化する」「承認する」という意味があり、コミュニケーション法としてのバリデーショは、認知症高齢者に共感して耳を傾け、評価することなく認知症高齢者にとっての現実を受け入れることだと、創始者であるアメリカ人ソーシャルワーカー、ナオミ・ファイルは述べている<sup>7)</sup>。ファイルは、1963～1980年にかけて認知症高齢者の尊厳を大切にしたいコミュニケーション法として、具体的な方法論を確立した。アメリカのオハイオ州にバリデーショトレーニング協会の本部を置き、その後、オーストラリアやヨーロッパ各地にも公認バリデーショ協会が設立され、広まっている。日本では2002年に紹介された後、日本の公認バリデーショ協会が仙台に設立され、認知症高齢者とのコミュニケーション法のひとつとして各領域で実践が重ねられている<sup>8)</sup>。

バリデーションの構成要素は、理論（原則）、基本的態度、そしてテクニックの3つで構成されている。まず、「すべての行動には理由がある」という考えに代表される、その土台ともなる11の基本的な考え方がある（表1参照）。その理論を基に、認知症高齢者にとって信頼できる聞き手となるために、“傾聴する”“共感する”“誘導しない”“受容する”“うそをつかない、ごまかさない”という5つの基本的態度をとることがまず必要となる<sup>9)</sup>。それらを踏まえつつ14の言語・非言語のテクニック（表2参照）を適切に使用することで、認知症高齢者と心を通わせるコミュニケーションが可能となる。つまり、いずれの要素が欠けても、認知症という症状を呈して、コミュニケーションが困難だと思われている人々と心を通わせることはできない、というものである。

バリデーションでは、その対象を見当識障害のある後期高齢者としている。先述の通り、彼らの言動の根底には心理的・社会的理由があると考え、彼らの行動を“これまでの生涯で抱えた人生の課題を、死が訪れるまでに解決しようと奮闘している姿”と仮説的に捉えている。そのため、言動の根底にこれらの考えを当てはめることが難しい若年性の認知症の人や精神疾患を持っている人はバリデーションによって恩恵を受ける対象とはしていない。

ファイルは先述の仮説を前提に、認知症高齢者がその奮闘に誰からも受け止めてもらえずにいると混乱を深め、最終的には自分の世界に完全に引きこもった植物状態になると考え、その経過を認知症高齢者の心身の状態や行動から4つの段階を示した。ただし、これらの段階は、聞き手が認知症高齢者をそれぞれの枠に当てはめ何らかの評価をするものではなく、聞き手がその時々で変化していくその人の状態に合ったテクニックを使用するために、その時の状態を知る際の手助けに用いる。

それぞれの段階は次の通りである。第1段階：日常生活にはほとんど影響はないものの見当識の低下があり、それを認識している「認知の混乱」、第2段階：言葉によるコミュニケーションは可能だが論理的に考えることが難しく、見当識の低下が顕著で実在するものとそうでないものの区別が困難な状態にある「日時・季節の混乱」、第3段階：話すことができなくなり、動作で感情を表現する「繰り返し動作」、第4段階：

完全に自分の内に引きこもって全く話をせず、周囲との関係ももたない「植物状態」、といった4段階がある。

バリデーションは、認知症で失っていく認知機能ではなく、認知症であっても失わない感情機能に注目している。それが認知症高齢者の行動について「問題行動」ではなく、「人生の課題に奮闘している行動」である、と彼らの立場から説明することを可能にした。さらに、バリデーションの具体的なテクニックによって、彼らの気持ちに沿った行動への対応が示された。これまで容認してきた嘘やごまかしといった人の尊厳を脅かすような対応をせず、徹底的に認知症高齢者の立場に立ち、共感と尊厳を具体的に実現可能にしたコミュニケーション法であるといえよう。

表1 バリデーションの基本的な考え方

1	共感的理解 共感を持って聞くことは、信頼関係を築き、不安を減らし、尊厳を取り戻します。
2	個性の尊重 すべてのお年寄りはユニーク（個性があり個別）で価値がある存在です。
3	全面受容 認知の混乱や見当識障害のあるお年寄りは、一個人として、あるがまま受け入れられる必要があります。私たちは決してお年寄りを変えようとはしません。
4	感情表出 つらい悲しみの気持ちは信頼できる聞き手によって認められ、バリデートされることによって癒されます。つらい悲しみの気持ちは無視されたり禁止されたりすると、より強くなります。そして、深く傷つきます。
5	行動には理由がある 認知の混乱や見当識障害のあるお年寄りの行動には必ず理由があります。認知症であるから、そういった行動をとるものではありません。
6	認知症高齢者の基本的欲求 認知の混乱や見当識障害のあるお年寄りの行動の根底にある理由は、基本的欲求（一つまたは複数）である可能性があります。
7	コーピング（対処法） 言語能力や最近の記憶が奪われると、若いときに身につけた行動が蘇ります。
8	シンボル 認知の混乱や見当識障害のお年寄りが使う個人的シンボルとは、思いのこもった過去の人、もの、概念の代わりとなる現在の人、ものです。
9	気づきのレベル 認知の混乱や見当識障害のあるお年寄りは、同時にいくつもの気づきのレベルにいます。お年寄りは真実を知っています。
10	過去への逃避 五感が失われると、認知の混乱や見当識障害のあるお年寄りは『内なる感覚』を刺激して使います。『心の目(想像力)』を使って過去を見、過去の音を聞きます。
11	ひきがね できごと、感情、色、音、におい、味、映像によって、感情が起こり、それが引き金となり、過去経験した感情と似た感情が出てきます。お年寄りは、減債において、過去と同じような反応の仕方をします。

出典：都村尚子「バリデーションへの誘い」全国コミュニティライフサポートセンター、2014、44-46頁（一部改変）

表2 バリデーショのテクニック

1	センタリング (精神の統一、集中)
2	相手を威嚇しないように、事実についての言葉を用いて信頼を築く
3	リフレージング
4	極端な表現を使う (最悪、最善の事態を想像させる)
5	反対のことを想像させる
6	思い出話をする (レミニシング)
7	真心をこめたアイコンタクトを保つ (視線を合わせる)
8	曖昧な表現を使う
9	低くはっきりとした愛情のこもった声で話す
10	相手の人の動作や感情を観察して合わせる (ミラーリング)
11	満たされていない人間的欲求と行動を結びつける
12	その人の好みの感覚を使う
13	タッチング
14	音楽を使う

出典:ナオミ・ファイル「バリデーショ・ブレイクスルー」全国コミュニティライフサポートセンター、2014、68-82頁より筆者作成

### Ⅲ. 文献研究

#### 1. 研究方法

対象とした文献は、国立情報学研究所のデータベース Cinii と医中誌 Web を用い、キーワードを「認知症」「バリデーショ」の2語で、検索年度を限定せずに2014年3月に検索を実施した。検索された文献は142件で、その多くは解説・総説と会議録であったため、原著論文のみを対象とした。そのうち複数の理論を極一部分ずつ紹介するにとどまった原著論文1件を除き、12件の原著論文を分析対象とした。

対象とした文献を「対象者」「介入方法」の観点で整理した。また、それぞれの「研究目的」「結果」について分類し、研究動向を概観した (巻末資料参照)。

#### 2. 結果

12文献のうち、バリデーショをコミュニケーション法として活用した実践・研究報告が11件、理論的検討報告が1件であった。

##### (1) 対象

実践・研究報告11件のうち、認知症高齢者を対象としたものが10件 (そのうち1件は一つの実践・研究報告のなかで、認知症高齢者とバリデーショ・ワー

カーのそれぞれを対象としているものを含む) で、いずれも自宅から離れ、高齢者施設や病院で過ごしている者であった。その認知症高齢者のステージは第1段階もしくは第2段階 (この段階を行き来しているケースも含む) が4件、第2から第3段階を行き来しているケースが1件、第3段階のケースが1件、不明4件であった。また、一つの介入対象者数は、1名が8件、2名が1件、多いもので10名が1件であった (巻末資料参照)。

ほかに、看護師を対象としたものが1件、バリデーショ・ワーカーを対象としたものが1件であった。認知症高齢者の介護をする家族や友人を対象としたものは見られなかった。

##### (2) 介入方法

実践・研究報告11件におけるバリデーショの介入方法をみると、バリデーショのみの実践を試みたものは8件、バリデーショと他の理論や療法を組み合わせたものは3件だった。また、バリデーシントレーニング協会の研修を受けて認定資格を得た者によって実践したものは1件、一日の研修を受講した者や職場での勉強会を経て実践したものは4件、不明が6件だった。実施期間は1か月程度が3件、2~3か月程度が4件、不明が4件だった。

##### (3) 文献研究にみるバリデーショの目的と成果

介入方法をみてもわかるように、それぞれの文献におけるバリデーショの位置づけはその実践の中心となるものから、作業療法を行う過程の一つとして部分的に併用しているものまで様々である。併用しているものについてはバリデーショに限って注目し、その導入目的をみた。この12件の文献から導き出された『バリデーショを使用する目的』は、「認知症高齢者の感情表出」「介護を困難にする行動・心理症状の改善」「バリデーショの有効性への探求」「認知症高齢者以外の対象に関する効果、可能性」の4つに分類し、それぞれ目的ごとの成果についても整理をすることができた。

##### ① 「認知症高齢者の感情表出」

これを目的とした文献は5件 (目的が2つある文献1件を含む) であった。喜怒哀楽といったすべての感情そのものの表出を目的としているもの、さらにそこ

から認知症高齢者の内的世界に共感していこうとするもの、または、日々繰り返される訴えや語りの言葉に注目して、その奥にある感情に近づこうとするもの、または表情からポジティブな部分に焦点を当て、その表出をみようとするものなどであった。

これらの結果は逐語録や研究者の観察から評価している。結果として、「自分（認知症高齢者）の気持ちの表出ができた」<sup>10)</sup>、「彼女（認知症高齢者）の中に押し込まれていた基本的な欲求「愛し、愛されたい」が行動として表出することができた」<sup>11)</sup>、「交流直後にポジティブな表情が多く見られた」<sup>12)</sup>という報告がされている。特筆すべきは、「(痛みを) 語ることによって利用者はその痛みへの自分の関わり・とらえ方を変えようとし始めることが可能になる」<sup>13)</sup>、「(拒否的な言動も) 生きてきた過程のなかで抑えてきたことややり残してきたことを解決するために、感情を表出するきっかけが必要」<sup>14)</sup>というように、ネガティブな感情である悲しみ、痛み、拒否的な言動についてもその価値を捉え、表出されることを重視する報告がみられていることである。

## ②「介護を困難にする行動・心理症状の改善」

これを目的とした文献は5件（目的が2つある文献2件を含む）であった。認知症の行動・心理症状は、記憶や見当識などの障害である中核症状によって引き起こされる生活障害であり、介護への抵抗や不穏状態、攻撃的な言動などがある。対象とした文献においては、「排泄援助への抵抗減少」「頻回な排泄の訴えの軽減」「暴言暴力等の随伴症状の軽減」「幻覚妄想の減少」を目的としていた。

これらの結果はほぼ研究者の観察から評価している。スケールを使用した前後の変化をみた文献は2件あるが、そのどちらも実践においてバリデーションだけではなく、他の理論や方法も併用した上での総合的な結果となっている。そこでは、認知症行動障害スケールにおいて行動障害の得点が減少したという報告<sup>15)</sup>、N式老年者用精神状態尺度の「関心・意欲・交流」や「会話」の項目における改善がみられたという報告<sup>16)</sup>がされている。

研究者の観察からみられる結果としては、“(カテーテル挿入で本来排泄行為の必要がない方の排泄に関する) 訴えが軽減した”<sup>17)</sup> “「不穏・興奮・攻撃」「暴力」

等が軽減・解消した”<sup>18)</sup> “ナースコールの頻度は顕著に少なくなり、幻覚妄想体験の訴えもほとんど消失”<sup>19)</sup>と、いずれの文献においても目的に対するある一定の効果を報告している。

## ③「バリデーションの有効性への探求」

目的の段階では具体的な要素を絞り込まずにバリデーション（もしくはバリデーションのひとつのテクニックに限定した実践）が何に有効であるかを検証した文献は2件あった。

それらの結果をみても、長谷川式認知症スケールの前後の得点比較においては変化がみられなかった<sup>20)</sup>が、認知症高齢者と援助者の言動の双方に“関係志向的な言動がみられるようになった”という変化や行動・心理症状については“状態の悪化はなかったといえる”といった報告<sup>21)</sup>がされている。

## ④「認知症高齢者以外の対象に関する効果、可能性」

①～③の目的はすべてバリデーションの開発された対象者である認知症高齢者について何らかを見出そうとする目的であるが、認知症高齢者以外の対象に対するバリデーションの効果や可能性を探ることを目的とした文献が3件（目的が2つある文献1件を含む）であった。認知症高齢者をケアする者に対する効果を検証しようとしたもの2件、バリデーションをアセスメントツールとして活用する可能性を探ったものが1件だった。

認知症高齢者をケアする看護師が認知症の行動障害（徘徊、自殺企図、せん妄、暴言暴力など）に対する感情の変化<sup>22)</sup>や、バリデーション・ワーカーの資格認定のためのトレーニング・コースを受講した者がバリデーションを実施して認知症高齢者と自分自身に起こった変化を検証<sup>23)</sup>している。統計的に有意な変化はみられていないが、どちらもバリデーションの実践前後で、認知症高齢者をケアする者自身に「恐怖感の軽減や気持ちに余裕が持てた」「患者の話を妄想、奇妙な行動を異常行動と決めつけていた」という気づき<sup>24)</sup>や、「バリデーション実施中以外の認知症高齢者への接し方が変わった」「認知症高齢者の状態の理解が深まった」という認識や行動の変化がみられたこと<sup>25)</sup>が報告されている。

#### IV. 考察

Ⅲ-2-(3)で示したバリデーションを使用した4つの目的と成果から、バリデーションによる支援の可能性について次の3つについての示唆が得られた。

一つ目は、「認知症高齢者の感情表出を促す要素がある」ということができると考える。なぜなら、これを目的とした研究が一番多く、主観的な評価ではあるが、いずれも認知症高齢者のネガティブな感情にも価値を見出し、受け止められたという結果が報告されているからである。これは、都村が述べている『バリデーションのゴール』であり<sup>26)</sup>、バリデーションの原則である“認知症高齢者があるがまま受け入れ、変えようとしてはならない”という考え方の表れであり、これまで認知症になると彼らの気持ちはわからないと諦められていた認知症高齢者をひとりの人としてのありのまま「気持ちを受け止められる要素」がバリデーションにはあるのではないだろうか。

二つ目は、「介護を困難にする行動・心理症状に変化をもたらす要素がある」ということができると考えられる。対象文献では、介護抵抗や幻覚妄想など一つの具体的な行動・心理症状の改善を目的と設定しているものも多い。「バリデーションの有効性への探求」を目的にした研究の結果においても、行動・心理症状や言語の変化を有効性の一つとして報告されている。ルビンによると、バリデーションは現在、世界各地で実践・検証を繰り返されることで内容が熟考された結果、当初の“セラピー”という位置づけから“メソッド”と変化した経過をたどっている<sup>27)</sup>。バリデーションはコミュニケーション法であり、過程そのものである、ということを確認すると、認知症に関するセラピー（治療）ではなく、メソッド（方法）ということになる。本来なら、セラピーを目的としていない方法において症状の改善・治療を求めることに論理的な矛盾はあるものの、コミュニケーションをとることで副次的に現れる影響という観点として「症状に変化をもたらす要素」をバリデーションに見出すことができると言えるのではないだろうか。

三つ目は、バリデーションには、認知症高齢者だけでなく、「ケアをする者に変化をもたらす要素」が存在するのではないかと考えられる。「認知症高齢者以外の対象に関する効果、可能性」を目的にした研究

では、看護師やバリデーションの有資格者といった認知症高齢者をケアする者について支援に対する気持ちのゆとりや、認知症高齢者の状態を本人の立場から理解することができるようになるといった視点の変化が報告されている。ファイルは、バリデーションによって恩恵を受けるのは認知症高齢者だけでなく、高齢者施設や病院のスタッフ、友人、介護をする家族にも役立つ、と述べており<sup>28)</sup>、対人援助である認知症ケアでは、認知症高齢者とケアする者は互いに影響を受け合い、相互作用を繰り返しながらその場が形成されている<sup>29)</sup>ということからも、バリデーションが認知症高齢者だけでなく、それに関わる者へも変化をもたらす要素が期待できるのではないだろうか。

わが国のバリデーションに関する研究は、これまで他の方法ではあまりみられなかった重度の認知症高齢者を対象とした実践報告がされるなど、対象となった認知症のレベルに幅が見られることが特徴的である。それは、認知症が軽度であっても重度であっても、実践できるテクニックをバリデーションが持ち合わせているためであろう。どのような状態になっても尊厳をもって生きることへの支援への可能性を示唆している点に大きな意味があると考えられる。

一方、今後の課題として以下のことが挙げられる。まずは、現在のところ病院や高齢者施設を生活基盤としている認知症高齢者に限った実践結果の蓄積のみとなっており、それを在宅で暮らす認知症高齢者についても検証していく必要がある。また、バリデーションを活用した効果についての報告は様々な観点からなされているが、その変化が認知症高齢者や彼らに関わる人々が生活する上でどういった影響があるのかという長期的な視野に立った研究はまだなされていない。さらには、バリデーションやその他の非薬物療法は、その目的・確認方法も多様であることから、系統立った研究報告が困難といわれている<sup>30)</sup>が、エビデンスの重要性が問われる昨今、目的によっては、事例報告にとどまらない統計的な効果の確認にも挑戦していく視点が必要になるだろうと考える。

#### V. おわりに

本稿では、これまでのバリデーションの研究動向を

文献レビューから概観し、見えてきた目的と成果からバリデーションの支援の可能性について考察した。その結果、バリデーションに関する研究は実践事例報告が多く、それぞれ個別に報告されており、バリデーションの特性を活かした“感情表出”“行動・心理症状に変化”“ケアをする者への変化”といった3つの支援の可能性がみられた。

しかし、今回はわが国において発表された文献のなかでの研究動向、考察にとどまったものである。今後の課題として、欧米で行われているバリデーションの研究動向はどのような状況であるのか、また支援に関してわが国との比較をしていくなど、より多面的な視点での分析も必要であると考えます。

日本にこの方法が紹介されて2年後の2004年から事例・研究報告がされているが、その数は多いとは言えない。今後も課題の一つひとつ取り組みながら、認知症高齢者の支援に貢献し得る結果を積み重ねていく必要がある。特に、認知症高齢者ではなく、ケアする者への変化についての研究はあまりされていない。しかし、対人支援において、対象者とケアする者は相互作用によって変化がもたらされていることから、バリデーションによるケアする者への変化に注目することは支援の方向性に広がりを持たせるために重要なことであろう。今後は、この文献研究を基に、認知症高齢者だけではなく、ケアする者への変化やそれが認知症高齢者への生活支援へどう影響しているのか明確にしていく必要があると考える。

## 引用・参考文献

- 1) 朝田隆ほか「都市部における認知症有病率と認知症の生活機能障害への対応」平成23年度～平成24年度総合研究報告書、2013年。
- 2) 警察庁生活安全局生活安全企画課「平成25年中における行方不明者の状況」2014年。
- 3) 大臣記者会見「田村大臣閣議後記者会見概要(平成26年6月6日)」厚生労働省 <http://www.mhlw.go.jp/stf/kaiken/daijin/0000047778.html> (参照2014.7.2)
- 4) 本間昭「痴呆性高齢者のQOLを考える」『老年社会科学』23-1、2001年、17-24頁。
- 5) 小澤勲「認知症治療のGOALを考える—認知症ケアの立場

- から—」『老年精神医学雑誌』17増刊号-II、2006年、73-77頁。
- 6) Naomi Feil and Vicki de Klarl-Rubin (2012) Validation Breakthrough :Simple Techniques for Communicating with People with Alzheimer's and Other Dementias, Third Edition ナオミ・ファイル、ビッキー・デクラーク・ルビン著、高橋誠一、篠崎人理監訳、飛松美紀訳『バリデーション・ブレイクスルー—認知症ケアの画期的メソッド』全国コミュニティライフサポートセンター、2014年、60-63頁。
- 7) 前掲書6)、59-60頁。
- 8) 公認日本バリデーション協会「バリデーション資料集(バリデーションセミナー2014)」2014年。
- 9) 都村尚子『バリデーションへの誘い』全国コミュニティライフサポートセンター、2014年、47-54頁。
- 10) 岩成淳治、矢田フミエ、原川由美、岡村美智子「認知症高齢者に対してセンター方式を活用してBPSDが軽減した1事例—バリデーションと継続的なバーバル・ノンバーバルコミュニケーションを用いて」『日本精神科看護学術集会誌』56-3、2013年、140-144頁。
- 11) 都村尚子、三田村知子、橋野建史「認知症高齢者ケアにおけるバリデーション技法に関する実践的研究」『関西福祉科学大学紀要』14、2010年、1-18頁。
- 12) 和長かおる、多幡明美、竹中智恵美「認知症高齢者の表情の変化を探る—バリデーションを取り入れて」『日本精神科看護学会誌』49-2、2006年、498-501頁。
- 13) 前掲書11)
- 14) 工藤美佐子「後期高齢認知症患者にバリデーションテクニックを取り入れたかかわり—拒否的な言動をする患者」『日本精神科看護学会誌』51-3、2008年、412-416頁。
- 15) 前掲書14)
- 16) 露木千佳、田中成之、小林朗子、伊澤けい子、田村浩司「重度認知症高齢者との関わりを通して—バリデーションを使って関わった経過と評価」『公立八鹿病院誌』16、2007年、27-30頁。
- 17) 柴田理恵、井戸芳和、務台均、畑幸彦「認知症の不穏状態に対し欲求を充足させる関わりが奏功した一患者」『長野県作業療法士会学術誌』28、2010年、91-96頁。
- 18) 前掲書16)
- 19) 高橋香恵、横山良隆、岸本朗「バリデーションによって静穏化した妄想状態を呈する痴呆老人の一事例」『病院・地域精神医学』47-2、2004年、143-144頁。
- 20) 佐野将司「バリデーション技法のリフレージングを使用しかかわった患者の会話の変化」『日本精神科看護学術集会誌』55-1、2012年、246-247頁。
- 21) 井上深幸、出野平恵「グループホームにおけるバリデーション技法展開の効果—痴呆性高齢者とのコミュニケーションを通して」『高齢者のケアと行動科学』10-2、2005年、27-30頁。
- 22) 新宮文香、木曾淳子、半田千恵子「認知症患者に対する看護師の対応困難感の軽減を目指して—バリデーション学習前後のアンケート調査から」『尾道市立市民病院医学雑誌』25-2、2010年、15-20頁。

